

❖ もう一つの「態」

読者のみなさんは、「能動態」あるいは「受動態」という文法用語をきつとご存知でしょう。「態」とは、文中で、主語が何らかの働きかけをしているのか、あるいは、他から働きかけを受けているのかを示す動詞の形を言います。

しかし、私から、英語にはさらにもう一つの「態」があると言われたら、おそらく、みなさんはあまりうれしく思わないかもしれません。能動態と受動態の使い分けでさえもやっかいなのに、まだもう一つ覚えなれないといけないなんて……。

しかし、この態の概念を理解することにより、今までみなさんが疑問に思っていた動詞の用法やパターンのいくつかについて、その仕組みが明らかになると思います。

このもう一つの態は「**中間態**」(middle voice) と呼ばれるものです。そして、能動態と受動態に加え、中間態で用いることができる動詞は、一般に「**中間動詞**」(middle verb) と呼ばれます。

英語の動詞には、能動態、受動態、そして中間態の3つの形をもつグループがあり、動詞全体の中でかなり大きな割合を占めています。

実はみなさんも、それと気づかないまま、今までに中間動詞を幾度となく用いてきたはずです。しかしその一方で、どれが中間動詞で、どれがそうでないかを知らないことが、英語である種の間違いを犯す原因になってきたであろうことを私は確信しています。それらの間違いは、**中間動詞とその働きを理解することにより、簡単に直すことができるでしょう。**

それでは、どのようにして中間動詞を見分ければよいのでし

ょうか？

例えば、次の(1)の文は、同じ意味を、受動態を用いて(2)のように言うことができます。

- (1) **The submarine sank the battleship.** [能動態]
潜水艦は戦艦を沈めた。
- (2) **The battleship was sunk by the submarine.** [受動態]
戦艦は潜水艦によって沈められた。

ここまでは、みなさんもよくご存知でしょう。しかし、sink という動詞は、受動態を用いず、もう一つの方法でこの概念を言い表すことができます。それは、sink を自動詞として用いて、能動態の目的語である the battleship をその主語にする方法です。

- (3) **The battleship sank.** [中間態]
戦艦は沈んだ。

この(3)の例文が中間態の典型例です。(1)～(3)は、sink を用いて、戦艦が沈むことを三通りの方法で表しています。このような使い方ができることから、sink が中間動詞であることがわかるのです。

いくらか専門的な言い方になりますが、

ある他動詞を自動詞として用いて、
他動詞として用いたときの目的語を、
主語にすることができる。